

2020年10月18日(日)／説教者：國分美生

説教：「被造物との連帯」

聖書：ローマの信徒への手紙8：18～30

福音書でイエスが、自然やそこに生きる生物たちを引き合いに出していることから察するに、現代人と比べ物にならないほど自然と密接な関係の下で、当時の人々が暮らしていたことがわかります。

本日の箇所パウロは、「被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます」と、人間以外の創造物たちの思いに触れています。創世記の天地創造からわかるように、人間と自然界は切っても切れない関係です。もともと熱心なユダヤ教徒だったパウロ。自然界と人間が神のもとで運命を共に分かち連帯関係にある、捉えている点は共通しています。神はご自分の造られた世界が適切に管理されるように、人間に働きを与えられました。だから旧約聖書によれば、アダムが罪に陥った時に同時に被造物も一緒に罪に定められることになったと考えます。しかしその苦難は絶望では終わらず、将来への希望をも、パウロは語ります。神と私たち人間の関係が正常なものに回復されるとき、被造物も共に救われるのだと。それは、人間が自然の一部だから自然界と人間がともに救われる、といえます。

絶滅の危機に瀕している天然記念物・ジュゴン。日本においては沖縄がジュゴンの唯一の生息地です。ジュゴンにとって大事な藻場が、辺野古新基地建設の現場にあります。

沖縄の文化にジュゴンは深く関わっています。かつては貴重な食糧源で、多くの遺跡からジュゴンの骨が発掘されていること、琉球王府への献上品とされたり、豊漁を願って御嶽への供え物としていたこと等々、海の生き物の中でもとりわけジュゴンは、沖縄の人と自然のつながりの象徴として捉えられてきました。沖縄防衛局が大浦湾内に設置した水中録音装置には、今年の2月から6月の間だけでも、198回のジュゴンらしき鳴き声を記録しています。自分たちの命をはぐくんできた大自然と生き物たちの命を殺し、さらに人殺しのための施設を無理やり作る、そしてそのプロセスの中でも人々を分断し、魂を殺していく。今、辺野古・大浦湾で行われているのはそのような作業です。

しかしそのような中でパウロが語る救いの確信を、私たちも確信したい。神は最初から、私たちのすべての願望や決断に先立って、ご自身と人間の関係の回復を決断されました。それは目には見えなくても、私たちは予定されていることとして希望をもって受け取るのです。その時私たちは、呻きを上げ、踏みにじられているものに対し具体的に行動を起こすことになるでしょう。キリストの福音はそのような生き方へと私たちを促します。(國分美生)